

安倍政権が全国農業協同組合連合会（JA全農）の組織刷新を柱とする農業改革をまとめた。自民党の農林部会長としてとりまとめの中心となった小泉進次郎氏を支えたのが、政府や自民党、JAにいる改革志向のメンバーだ。「農業を新たな成長産業に」。こんな志を共有し、小泉氏の知恵袋や党内外の調整役として汗を流した。

11月25日、改革案を了承した自民党本部での農林合同会議。「どうもありがとうございました」。会議後、小泉氏が頭を下げたのは齋藤健農水副大臣だった。

経済産業省出身の齋藤氏は小泉氏と同じく、農業政策は「全くの門外漢」だった。農業を成長戦略に据える安倍政権肝煎りの人事として3年前、小泉氏の前任の農林部会長に就きコメの生産調整（減反）廃止に尽力。その経験から「部会長は裏方に徹し、先輩方の信頼を得ることが大事だ」と助言してきた。今は政府の一員として改革を進める。

JAグループの組織改革が農業改革の本丸という小泉氏の理論的支柱は、自他ともに「誰よりもJAを知る人物」と認める奥原正明農水次官だ。6月の次官就任まで4年10カ月間、JAグループを監督する同省の経営局長を務めた。農業活性化に向けてあらゆる規制を聖域なく見直すのが持論。こつした改革志向を買い、菅義偉官房長官が次官に抜てきした。「奥原がいないと今回の改革は

「稼ぐ農業」へ地ならし

小泉氏支える「改革派」

まとまらなかった」。政府の金丸恭文会長兼社長は高官はこう信頼を寄せる。政府の規制改革推進会議のIT（情報技術）コンサルメンバーで今回の改革の土ルティング会社フューチャ台となる提言を作った。農代理だ。三菱商事出身でヒ

業担当の作業部会座長として小泉氏を側面支援する。選挙にらみで政策が農家の保護に偏る傾向がある自民党。その中であって、農業活性化策を議論している若手議員ら「チーム小泉」と呼ばれるメンバーの番頭を格が、福田達夫農林部会長代理だ。三菱商事出身でヒ

農業改革、小泉氏支えるメンバー



知恵袋・調整役、現実的に助言

と小泉氏に耳打ちした。期限内に猶予を持たせる現実的な案に修正させた。党側では農林族の重鎮、西川公也元農相がらみをかき寄せた。「会議は始まるまでが全てだ」。小泉氏の「後見役」として、西川氏は農林族への説明を欠かさぬよう助言。時に前のめりになる小泉氏のプレーキ役になった。「小泉氏は30年後も改革の責任を負う。あの時の改革が悪かった」と批判されないようにする」との思いだった。

抵抗勢力とみられがちなJAでは、全国の農協を束ねる全国農業協同組合中央会（JA全中）の奥野長衛会長が小泉氏の改革に一定の理解を示してきた。「あんたが対話路線を敷くからだ」。規制改革会議が急進的な内容の提言をまとめる、と、反発するJA関係者からこんな非難を浴びた。「小泉氏と築いてきたものがあります」。その後、11月下旬に会った菅長官には苦しい胸の内を明かしながらも、とりまとめに向けて協力する考えを伝えた。

政府が農業改革を最終決定した29日、小泉氏は記者団に語った。「政府や党、さらにはJAや農林族の先輩方にも本当に、本当に助けてもらった」

（竹内悠介、中戸川誠）